みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

狩猟採集民研究の新たな可能性を問う：第10回国際狩猟採集社会会議に参加して：共同研究：熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究：アジア・アフリカ・南アメリカの比較から（2012～2014）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005924

PROJECT

狩猟採集民研究の新たな可能性を問う ──第10回国際狩猟採集社会会議に参加して──

文・写真
池谷和信

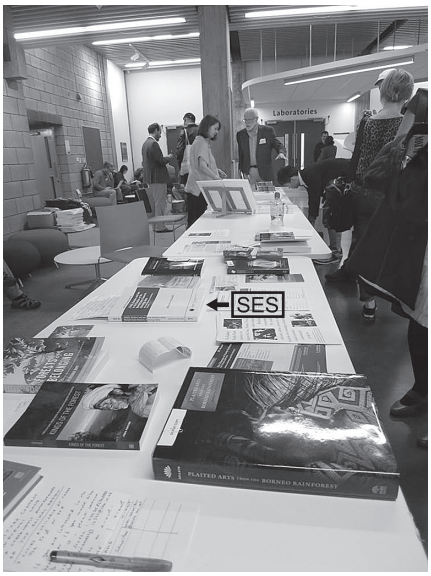
共同研究 ● 熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究
──アジア・アフリカ・南アメリカの比較から（2012-2014）

11年ぶりの会議

2013年6月25日から28日まで、第10回国際狩猟採集社会会議（International Conference on Hunting and Gathering Societies、略してCHAGSチャグス）が英国のリバプール大学にて開催された。主催者は、アフリカ考古学を専門とするラリー・バーラムである。前回の会議が2002年9月であっただけに（池谷 2003）、実に11年ぶりの開催になった。このあいだに狩猟採集社会自体が変化してきたことはもちろんのこと、人類学を中心とした学術研究の傾向やあり方も変わってきた。はたして、この分野の研究は進展しているのだろうか、多くの研究者は今回の会議に対して期待と不安をいだいていたであろう。

しかし、予想以上の参加者が集まり、全体として会議は盛況であったといえる。まず、会議には世界約30ヵ国から約200〜250名の参加者がみられた。英国を中心として米国、カナダ、ドイツ、フランス、ベルギー、オランダ、オーストリア、ロシア、スウェーデン、ブラジル、インド、タイ、マレーシア、インドネシア、カメルーン、ボツワナ、エチオピア、日本などである。日本からは合計で20名以上の参加者があり、この分野の層の厚さがうかがわれる。また、途上国からの参加者は10名以下と少ない点が、今回の特徴になっている。

ここでは、国立民族学博物館（民博）・共同研究のテーマである「狩猟採集民の環境史」に関する内容を中心として、この会議を紹介する。筆者は、この会議のなかで「狩猟採集民と隣人との関係」（1部および2部）というセッションを組織しており、これは共同研究の中間的な成果の1つとして意識して行ったものである。このため、2013年4月下旬には、同名のテーマでの研究会を民博で開催している。会議は、3〜4会場で研究報告が同時に行われたので、私の観察には限界があることを加えておきたい。



会場のようす。狩猟採集民関係の本（SESを含む）が並ぶ。

会議の全体内容

今回の基調講演は、前回大会の主催者の1人であるアラン・バーナード（エジンバラ大学）であった。一言でいうと狩猟採集民の進化史といった内容で、ホモ・サピエンス以前の時代から始まり、自らが調査経験のあるボツワナのサンの現況にまで至るという目配りのきいたものであった。その後のセッションでは、個々のテーマや個々の地域に分かれ内容が細部に至るので、基調講演の内容にはあまり新たな知見が含まれていないようにみえるが、狩猟採集社会研究の全体像を示してくれた。

「第10回国際狩猟採集社会会議」の全セッション名

1 問われる遊動の意義
2 狩猟採集民の社会性
3 暴力
4 ダンスと儀礼
5 文化的レジリアンス
6 活動力と技巧
7 子供らしさ
8 認識される言語
9 行動的レジリアンス
10 狩猟採集民と隣人との関係（1部、2部）
11 土地との存在論的な関係
12 ドラヴィダ系狩猟採集民
13 集団遺伝学
14 狩猟採集民の民芸品

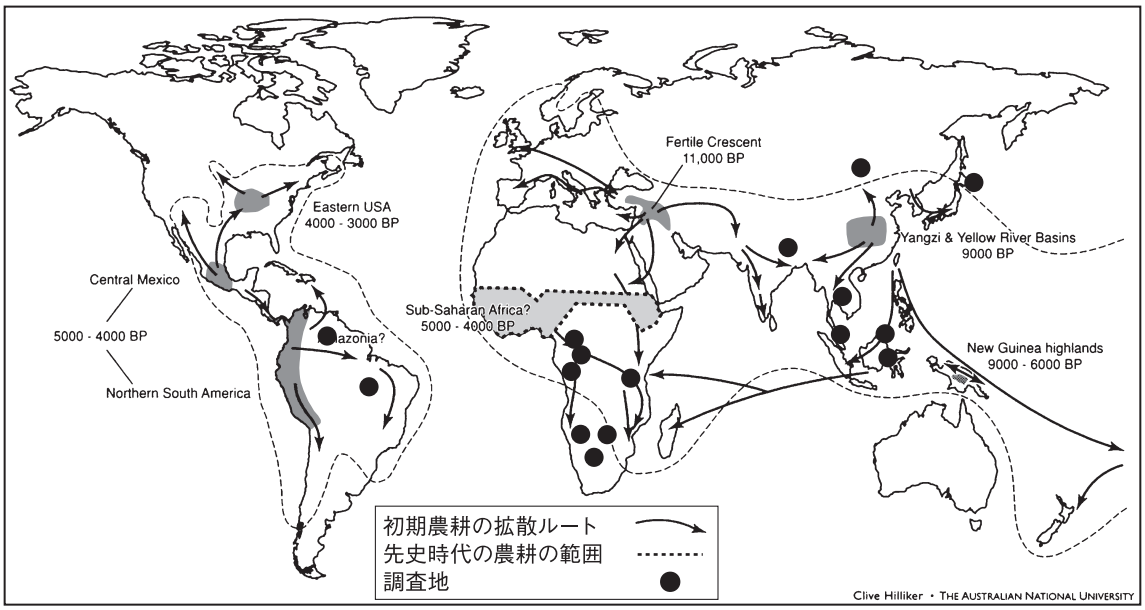
表は、今回の会議における14のセッション名の一覧を示す。前回の会議では28のセッションがあったので、その数は半分になっている。また、テーマ別では考古学や歴史や先住民運動の報告が少なく、集団遺伝学、進化、暴力、言語、レジリアンスなどが新たなテーマとして加えられた。これらのことは、過去から現在の狩猟採集民の変容を扱うものというよりは、「狩猟採集民とは何か？」という問いに答えるべく彼／彼女らの本質を論じるものが多くなっている傾向を物語る。地域では、中部および東アフリカと東南アジアが中心であり、極北や南アメリカの研究は少なかった。個別の民族では、アフリカのピグミー、ハッツア、ボルネオ島のプナンの研究が多くのセッションに含まれていて目立った。前回と同様に、インドの研究（表の12）は地域に焦点を当てたセッションになっている。

おそらく研究を進めるには、種をまく人、育てる人、収穫する人が必要であると思われるが、この会議で種をまく人は、ガボンのピグミーやネパールのラウテ、エチオピアのシャブなどの研究者を除いて少数になっているように思える。また、人類進化の視点から、例えば現在のハッツアの民族誌から人類の初期的姿を復元することは本当に可能であるのか否か、ますます方法論上の論議が必要になっているという印象を得た。

狩猟採集民と隣人との関係

今回の会議では、地域別のセッションが少なかったこともあり、同じ地域の報告を聞くために、会場間を移動する人が多かった。これは、地域の研究を掘り下げていくためには不可欠であるが、同時に世界の狩猟採集民の全体像をどのように理解したらよいか、自らの地域の研究の位置づけを考えるには地域間比較の視点も必要であろう。個別の民族誌と比較研究のバランスが問われることになる。例えば、今回の会議では、アイヌの研究報告は1件しかなかったが、多様なセッションのなかにアイヌ研究をさらに組み入れることで世界の

「狩猟採集民と隣人」セッションにおける発表者の調査地・16ヵ所（Bellwood, 2005より筆者作成）



なかでの位置づけが理解できるであろう。

私が代表となったセッションでは、狩猟採集民と隣人との関係における過去と現在に焦点を当てている。これは、筆者が編者の1人になっている論文集『アジア・アフリカにおける狩猟採集民と農耕民との関係』（Ikeya *et al*. (eds.) 2009）の内容をさらに展開したいという意図から生まれたものである。そこで、可能な範囲で世界中の事例を集めることに力を入れた。アフリカ、東南アジア、南アジアのみならず、極北、南アメリカ、日本（アイヌ）まで地球上の16地域に対象は広がっている（図参照）。これによって、地域比較の基礎ができたことになる。また、17〜19世紀の植民地時代、20世紀以降のポストコロニアル時代などのように時代別に分けることも重要であるという研究枠組みを示した。

私は、自らの報告ではカラハリ砂漠の狩猟採集民と隣人との関係を示す先行研究を整理する一方で、自らの事例を位置づけることから両者のあいだにおける多様な関係を示す変遷モデルを示した。ここでいう隣人とは、農耕民、牧畜民、交易人、商人、観光業者、行政関係者などである。また、カナダの研究者ダロスの理論的研究は興味深い。彼女は、マレー半島における狩猟民・農耕民関係の政治的意味を問うている。この地域では、19世紀以来継続しているマレーや中国人の仲買が入る森林産物の交易と、村人と直接行う小規模な森林産物の交易がみられる。この2つには、背景となる組織の違いが認められる。また、狩猟採集民の交易は、村人の活動などをパトロールすることが目的であって、境界を守るための交易であるとされ、彼らはPolitical playerとして捉えられている。このほかにも、狩猟採集民と商業民との新たな社会経済関係に焦点を当てた研究のほか、数多くの興味深い報告があったが、紙面の関係で稿を改めて論じることにする。

今後の研究にむけて

今回の会議では、過去11年にわたって狩猟採集社会は変貌するなかで、狩猟採集民研究は衰えるどころかますます盛んになっていることを確認できた。しかし、その研究内容は歴史修正主義的な視点は少なく本質主義的な研究が増えている。また、前回の会議とは異なり、対象となる住民が1人も参加をしていない会議になっている。先住民からの声をテーマにした時間はあったが、アフリカのピグミーの事例を中心としてすべて映像で紹介するものであった。

筆者は会議に参加して、現在の狩猟採集民は、近代化をおしすすめる定住化政策や開発政策によって、各地域の個別性より類似性がますます増大しているような印象を受けた。カラハリのサンとムラブリ、中部アフリカのピグミーとオランアスリなど。これにともない、研究者にとっての狩猟採集民はよく理解できるのであるが、ますます現実の実態と研究テーマとのあいだに乖離がみられる気がする。個人的には、「狩猟採集民」とは誰であるのか、この会議は誰のための会議であるのか、何を究極的な目標にしているのかが、ますますわからなくなった。

しかしながら、世界の研究者に直接、会えた意義は大きい。個々の研究者の関心ある最新テーマを把握することができ、自らの研究をより大きく展開するのにはすこぶる有効であった。私たちの研究は世界に発信されているかを常に検討すること、この種の国際会議との連動を意識して国内の学会や各種の研究会を行う必要があることをさらに痛感することになった。なお、次回の会議は、2015年9月にオーストリアのウィーン大学にて開催されることが決定した。主催者となるシュバイツアーは、極北を専門としていて、今回の会議では軽視されていた歴史のなかでの狩猟採集民や先住民問題などに重点を当てたいと言及している。おそらく今回とは様相が異なる会議となるであろう。

【参考文献】

池谷和信 2003「狩猟採集民研究は、人類学理論にいかに貢献できるのか――第9回国際狩猟採集社会会議に参加して――」『民博通信』100：22–23。

Ikeya, K. *et al*. (eds.) 2009. *Interactions between Hunter-Gatherers and Farmers: from Prehistory to Present* (Senri Ethnological Studies No. 73). Osaka: National Museum of Ethnology.

いけや かずのぶ

国立民族学博物館民族社会研究部教授。人類学・地理学専攻。アフリカを中心に、日本を含むアジア、シベリア（チュコトカ）、アマゾンの狩猟採集文化について研究をしてきた。おもな著書に『ボツワナを知るための52章』（編著 明石書店 2012年）、『地球環境史からの問い――人と自然の共生とは何か』（編著 岩波書店 2009年）、『生き物文化の地理学』（編著 海青社 2013年）などがある。